

第3節 井戸枠用結桶の竹簍について

今回の富山城下町遺跡主要部の調査では、結桶組型井戸枠を伴う井戸を6基（SE110・SE242・SE248・SE273・SE281・SE286）検出した。各井戸枠を構成する結桶は、いずれも環状の簍によって側板が固定されていた。残念ながら、現場での制約や遺物の遺存状態のために、側板を取り上げるのが精一杯で、簍についてはほとんど取り上げることができなかった。しかし、簍がどのようなものであったのか、手書きメモ程度ではあるが調査時にできる限りの記録は取っている。そこで本節では、井戸枠用結桶の簍について、現地での観察所見を記しておくことにしたい。

井戸枠用の結桶を固定していたのは、いずれも竹簍である。植物解剖学的な同定を経たわけではないが、各簍を構成する条材の質感や節等の諸特徴から、比較的径が大きく厚みのあるイネ科タケ亜科植物の稈を、幅1～2cm程度に割り裂いて素材に使用していると見られる。結桶・結樽の竹簍について、文献資料・絵画資料・民具資料を詳しく検討した石村真一氏の論考「竹簍の技術と文化」（石村1991）によれば、竹簍と言えは一般的にマダケ（真竹）の類を使用しているようである。以下、同論考を参考にしながら、本遺跡の井戸枠用結桶の竹簍について検討する。

石村氏は、竹簍が基本的に2種類の編み方から成立していることを指摘し、条材をねじる（ひねる）ように編んだものを「ねじり編み」、条材を矢羽根状に組み編んだものを「組編み」と呼んでいる。ただし、ねじり編みはカゴ類の「もじり編み（一方の条材に別の条材を絡め編む技法）」（松永2015）と似ていて紛らわしく、また組編み（組み編み）はカゴ類について別の技法（条材を単純交差させる広義の網代編みのうち、特に同じ太さ・柔軟性の素材を用いるもの等）について使用されること（センテンス2002）があって混乱を招く恐れがある。そこで、本節では簍の編み方であることを強調して、前者の技法を「ねじり簍編み」、後者の技法を「組み簍編み」と呼ぶことにする（第106図1～4）。各技法による簍そのものを指す場合は、語尾の「編み」を取って、「ねじり簍」・「組み簍」とする。組んでいる動作を強調するため、組み簍には送り仮名を付する。石村氏も、送り仮名こそ使用していないが、「ねじり簍」・「組簍」という語は使用しており、特に違和感はないだろう。なお、条材をねじるだけの前者より、条材を組み編む後者の方が、製作に手間がかかることは言うまでもない。

さて、今回の富山城下町遺跡主要部で見られた井戸枠用結桶の竹簍は、確認できたものはいずれもねじり簍の類であった。それらの簍を構成する条材のねじり方については、全てS方向（縄文原体で言うLの捻りと同じ方向）であった（第106図1）。簍のねじり方は、製作者の利き腕や意匠などに関係する可能性があり、ここでは深く追及しないが、基本情報としておさえておきたい。石村氏によると、ねじり簍編みも組み簍編みも最低四重にならないと機能を持たないそうであるが、本遺跡の竹簍は結桶出土後まもなく崩れてしまったため、何重のものだったかは不明である。

結桶1つあたりに使用される簍の数は、結桶の法量（大きさ・長さ）によって異なり、中～小型のSE110・SE286では2段（上段・下段）、中型のSE242・SE281では3段（上段・中段・下段）、大型（縦長型）のSE248では4段（上段・中上段・中下段・下段）の簍が使用されていた。SE273については、結桶1つの上半部を確認して間もなく周辺地山が崩落し、取り上げができなかったため、簍の正確な段数は不明である。しかし、結桶の径などから判断して、おそらくSE273の井戸枠用結桶には2段（多くても3段）の簍が使用されていたものと推測される。当然のことながら、長大なものほど使用される簍の数が多し。

結桶の簍の編み方について、石村氏は「上がねじり簍、下が組簍というタイプが江戸後期に最も多く描かれており、一種の形式美として位置付けることができよう」と述べているが、今回の調査にお

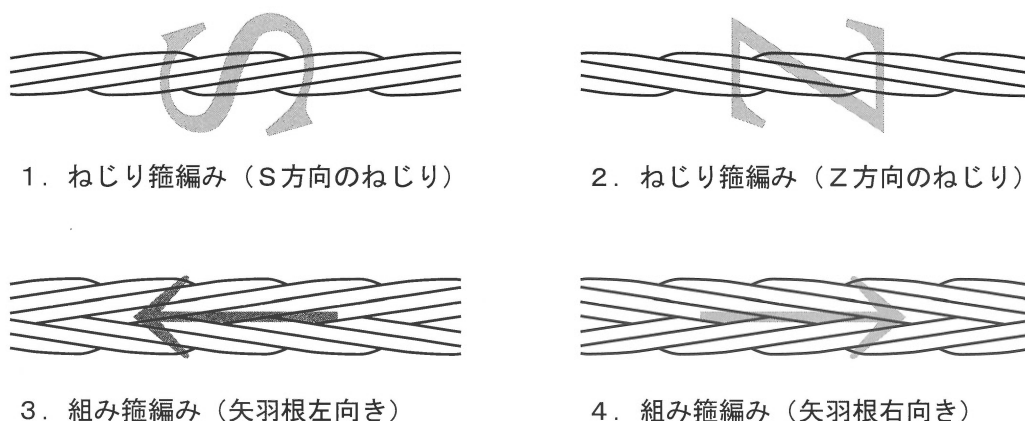
いて組み籠は一切確認できなかった。石村氏が形式美として位置づけたのは、基本的に容器として使用された結桶の竹籠のことであり、同じ江戸時代でも、井戸枠に使用された結桶の竹籠には当てはまらないようである。

本遺跡でねじり籠のみを使用していたのは、おそらく井戸枠用結桶が、あくまで井戸の壁面保護を目的として埋設されるものだったからであろう。井戸枠は、一度設置して掘方との空隙を土で埋めてしまえば、井戸そのものが大きく崩壊するような出来事（地震のような災害など）がない限り、壁面保護施設としての機能を発揮し、比較的簡易なねじり籠であっても崩れる恐れはほとんどない。複数の結桶が積み上げられるものについては、下段の結桶が上段の結桶の内側を支える形になっており、さらに崩れにくくなっているものと見られる。また、地表下に埋設されてしまえば、竹籠は人目に触れることがないことから、意匠を凝らす必要もない。それならば、この種の結桶に比較的複雑な組み籠編みを用いることは、むしろ労力の無駄である。そのため、井戸枠用結桶の固定には、組み籠編みよりも単純なねじり籠編みによる竹籠が選択・使用されたものと考えられる。

これまでの富山城下町遺跡の調査において、結桶を積み重ねた井戸枠が見つかった例は多々あるが、井戸枠用結桶の大きさや側板の枚数などについて述べるものが大半で、結桶の竹籠についての所見まで述べたものはほとんどなかったように思う。もちろん結桶の法量・数量データ等は把握する必要があるが、籠も結桶に必ず伴う付属物であり、決して無視することはできない。

もちろん理想を言えば、竹籠が全て付いた状態で結桶を取り上げるべきであろうが、市街地での開発に伴う緊急発掘調査などでは、様々な制約によって全てを持ち帰ることができないこともあるだろう。そのような場合でも、本節で述べたような記録は取ることができるはずであり、井戸枠構造や結桶製作について考える上での手がかりとして注意する必要がある。一つの問題提起として、竹籠の観察・記録の必要性を強調しておきたい。

(松永)



※ 1・2 をセットにして矢羽根状にする場合もある

第 106 図 竹籠の編み方と基本